

2022年7月の総評に代えて

○林 桂 ○

● 郡司和斗 ● (茨城県 24歳)

電話がまだ
うつくしかった季節に
よく靴を磨いた

【評】携帯電話が普及する前の固定式電話の時代。革靴もまた同じようにうつくしい特別な存在だったのである。

● 大橋弘典 ● (群馬県 20歳)

信頼の代わりに居座ってる金魚

【評】時に金魚は心の拠り所のようになって、水槽を泳いでいる。本当に「信頼」するべきものに遭遇する前のしばしの時間。

● 春町美月 ● (大阪府 45歳)

声の小さい私の側に
そない言わんといたって
って言ってくれる

祖母がいたこと

【評】内気でうまく人の中に溶け込めないでいる幼い私の絶対的な庇護者として、祖母はいつも現れてくれたのである。

● 浅葱 ● (愛知県 22歳)

線路から陽炎のにおい

【評】陽炎の立ち上る鉄路。ほとんど列車のくる気配もないローカル線だろう。どこか懐かしく心に仕舞われていた風景。ひとりぼっちの夏休みか。

● 風船 ● (東京都 31歳)

人生で一番髪の長い今夜は
月明かりの下で
編みものをすると 決めた

【評】今夜の私は、人生で一番長生きした私。常に現在は、自分史上何かの一番を生きている。一番長い髪の夜にする編み物は、何か儀式めいてみえる。

● 立花ばとん ● (東京都 21 歳)

毛細血管を巡るように
慎重に眠りながら
大学に行き、
帰る

【評】大学への毎日、広いキャンパスも決められた細道を歩くように、正確に巡って生活している。しかし、この文脈に埋め込まれた「眠りながら」が持つ違和感は、単に眠いということではないからだろう。

● 源楓香 ● (北海道 21 歳)

明日から涙に税を課すけれど
誰も泣き止まないような国

【評】究極の感情表現のひとつである涙（泣く）に、税を課すような国家は既に終わっている。それゆえに誰も泣くことをやめない。既に私たちの「涙」に当たるものにも課税されているのかかもしれない、と思う。

● 猫谷圭希 ● (広島県 22 歳)

僕がまだ言えないでいる事を
右手の水風船が
ぽちやぽちや告げる

【評】最終行が愉快。「〇〇は口ほどにものを言い」の、〇〇が「水風船」である面白さ。

● 青野陽 ● (熊本県 19歳)

何もかも教室に捨て置いた
窓の向こうで雲が弾けてたから

【評】「窓の向こうで雲が弾けてたから」をどう読むかで、一行目も違ってくる。原爆雲のようにも思えるし、単なる入道雲のようにも見える。教室の日常に急に割り込んできた非日常であるには違いない。

● 氷丸 ● (茨城県 19歳)

電車去って

日曜が戻る
線路沿いの風を重たくする
ナガミヒナゲシの静かな性欲

【評】最終行が印象的。それまでの3行を回収するのでもなく、さらに謎を深める。「ナガミヒナゲシ」が効いている。油断すると一面に広がる毒性のオレンジ色の雑草だ。

● 高々 ● (愛知県 46歳)

白線を選んで歩く
夏至の少年

【評】路肩の白線。少年は単に歩くのではなく、歩くことに目的を入れる。時に石を蹴ったり、缶を蹴ったりもする。

● 杖いう子 ● (佐賀県 38歳)

裏路地に撒く撒菱と天の川

【評】撒菱を撒くのは忍者である。どんな少年忍者の想像が、路地裏に撒菱と天の川を撒いたのであろうか。

● 田崎森太 ● (東京都 71歳)

七夕の牛糸してゐる老ピノキオ

【評】人間の子になったゆえに、ピノキオは老いるはずである。老いたピノキオは、革職人となって、余生を送っているのだろうか。

● 吉沢 美香 ● (宮城県 22歳)

掃除して
スノードームをひっくり返して

【評】普段、スノードームをひっくり返すこともしなくなってしまっているのだろう。棚の掃除で取り上げたのを機会に、ひっくり返す。何気ない日常の機微を感じさせる。

● 早川のり ● (愛知県 29歳)

気をつけていても踏む蚯蚓、謝る

【評】「謝る」は反射的な行為なのだろう。作者の人間性が出ていている。

● マズルカ ● (山口県 20歳)

制服があれば
それなりには見える

趣味は辞典を集めることです

【評】「それなりには見える」は、真面目な学生ということだろう。しかし、「趣味は辞典を集めることです」は、それなりを越えている。ちなみに、私は辞書集めが趣味の人に出会ったことはない。

● 藤 雪陽 ● (長野県 37歳)

むらさきの朝
雪のにおいがするね

【評】初雪がやってきそうな朝。「むらさきの」が、まだ薄闇の清澄な空気感を伝える。視覚の前に雪は匂いでやってくる。